

かたりべ121

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより

追悼企画 豊島区ゆかりの作家たち

作家・絵本作家 舟崎 克彦 (ふなざき かつひこ) (一九四五—二〇一五)



舟崎美紀子氏提供

【豊島区を舞台にした作品】

舟崎克彦は、一九四五（昭和二〇）年二月二日、戦時下の聖路加国際病院（中央区）で誕生し、生後数日で豊島区千早町三丁目の邸宅に戻り、一九六二（昭和三七）年一七歳までここで過ごしました。日本金属創始者の舟崎由之を祖父に持ち、ふたりの兄とともに裕福な家庭で育ちますが、七歳の時、最愛の母を目前で亡くします。多感な時期を過ごした千早町や目白の風景は、舟崎作品の舞台となり、代表作が生まれました。一九七四（昭和四九）年に発表された『雨の動物園 私の博物誌』（偕成社刊）は、昭和三〇年代の豊島区千早町をメイン舞台に舟崎少年が関わった多種の野鳥や小動物、植物の生態を、実体験をまじえながら記述しています。鋭い観察眼で描いた一〇〇カット以上の挿絵が添えられており、まるで動物植物図鑑のような体裁でありながら、少年が生きものたちとのふれあいを通じて気づかされる《生きる》ということを、読者に問いかけているような作品です。国際アンデルセン賞優良作品賞、サンケイ児童出版文化賞を受賞し、版を替えながら四〇年以上読まれ続けています。



『雨の動物園 私の博物誌』初版 偕成社(1974)豊島区蔵

また、一九七〇（昭和四五）年に発表された『ぼっぺん先生の日曜日』（筑摩書房刊）は、舟崎の母校学習院大学（目白

のキャンパスをモデルにした舞台で、生物学博士のぼっぺん先生が繰り広げる食物連鎖と輪廻転生の不思議な世界を、生き物の生態を熟知した舟崎が面白おかしく描いています。また、一九七四（昭和四九）年発表の『ぼっぺん先生と帰らずの沼』は、「赤い鳥文学賞」を受賞し、好評を博して発表された「ぼっぺん先生物語」シリーズは全九作品となり、「路傍の石文学賞」を受賞します。



『ぼっぺん先生と帰らずの沼』初版 筑摩書房(1974)豊島区蔵

【舟崎作品の魅力】

童話、絵本、小説、エッセイなどの執筆に加え、数々の文学賞受賞歴をもつ舟崎が生み出す作品は、空想・夢想・憂愁・繊細・豪快・粋・奇知・孤独が共存しており、さらに現実批判を盛り込んだ幻想世界を描くナンセンスファンタジーでもあります。また、自己の文章に挿絵を描くことにより独特の世界観が生まれ、読者を舟崎ワールドへと誘います。このような作家は、日本の児童文学界においてとても希少な存在です。二〇一六（平成二八）年、作家デビュー五〇周年を迎えるはずだった舟崎克彦がこれまでに発表した作品は四〇〇冊以上にのぼります。

豊島区では、（仮称）芸術文化資料館開設に向け、文学・マンガ分野常設展示室内に舟崎克彦コーナーの設置を計画しており、二〇二一（平成三三）年以降、舟崎自ら全面協力体制で臨んでいました。二〇二五（平成二七）年には作品原稿や大小含む原画など約五〇〇点を豊島区に寄贈し、同年九月にインタビュー映像収録を終えましたが、一月五日、闘病の末、天国へ旅立ちました。ぼっぺん先生は、これからもずっと、図書館や（仮称）芸術文化資料館で、世代を超えてメッセージを送り、生き続けます。

（文学・マンガ 荒川）

市郡併合に関する高田町の事前視察調査について

一九三二（昭和七）年一〇月一日、東京市隣接5郡82町村が合併しました。これにより、巢鴨・西巢鴨・高田・長崎の旧4町が廃止され、東京市の一部となり、新20区の一つとして豊島区が誕生します。東京市域の拡張、隣接町村の合併が最初に問題になったのは、一九一九（大正八）年頃からであり、近郊町村の現状調査がおこなわれていました。

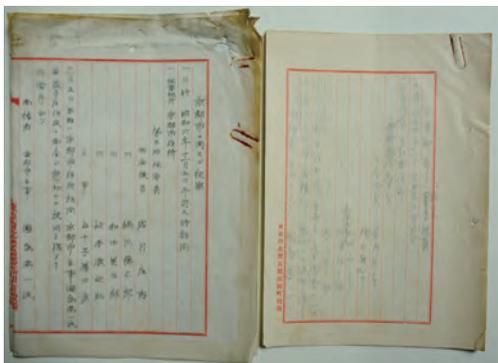
高田町では合併の前年である一九三一年一月四日から六日にかけて、町議会員岩月庄吉・橋爪藤太郎・和田美三郎・坂本辰之助、そして高田町の主事であった五十子善三良を「第三班視察員」として名古屋市・京都市・大阪市に派遣し、合併に関する視察調査をしています。



市郡併合諮問答申案議決の高田町会
（『高田町史』口絵より引用）



「名古屋・京都・大坂隣接町村併合書類」
と書かれた封筒と視察記録3冊



「京都市二関スル視察」

鉛筆で書かれた下書き(右)それを清書したもの(左)

名古屋市は、簡略に「有ノ假ニテ引継タリ」とだけ書かれており、あまり選別せずにかかなりの分量をそのまま引き継いだようです。

京都市は、「有ノ儘引継タリ、永久保存ノモノ又会計ニ属スルモノハ五ヶ年間分、其他必要ノ書類ハ市ニ持来リ、他ハ出張所ニ保管セシメタリ、年限到来ヲ待チ廃棄ノ見込ナリ」とあり、

「高田地区関連文書類」には、その視

察記録が残っており、当時懸念していた事項や、その準備の様相がうかがえます。

高田町が各市の面接者に対して問い合

わせた事項は30にも及んでいます。紙数の都合上、すべてを掲載することはできませんが、その問い合わせに対する各市の回答を少しご紹介します。

まず初めに、なぜ合併することになったのか、「編入ヲ必要トシタル理由並ニ経過」についてみてみましょう。

名古屋市は、都市計画に必要であったことと、一時は民生派の市長となり、立ち消えになることもあったが、一九二一年に政友派の市長となつて進展したという政治的な背景が述べられています。

続いて、京都市は、度々実施された編成と、工場地としての関係、観光地としての使命のためであるとし、大規模な都市形成が必要であったと答えています。

一方大阪市は、拡張前の人口の急増と財政・衛生等について救済の目的であるとしています。

行政が抱えている問題や状況によって、合併する理由は様々でした。同様に、高田町でも人口の増加や衛生面での問題を抱えていました。特に、財政とも大きく関係した下水道の敷設事業の引継（かた）り（113号参照）は重要な課題となつていたので

たのです。

続いて「簿書引継に関する事項」、つまり現在でいう、公文書の保存管理についての回答をみてみましょう。

保存年限規程以外の文書でも必要なものは一定期間保存するという措置がとられていました。

一方大阪市は、「保存年限中ノモノ丈ケ引継タリ」とし、保存年限を重視しており、この段階で機械的に旧町村文書が廃棄された可能性がうかがえます。

高田町にも文書保存管理規程がありましたが（かた）り（111号参照）、市郡併合後どうなったのかは定かではありません。実際のところその多くは失われているでしょう。しかし、高田町に限っては当時の町の職員であった五十子善三良が、私的に保管していたため、空襲による焼失や行政による廃棄にも対象とならずに残されました。

現在では、公文書の持ち出しは、個人情報流出の危険性などにより原則禁止されています。ところで五十子は、なぜ文書を持ち出したのでしょうか。今ではその答えはわかりません。しかし、正しくはない遺された方をしたこの文書は、後世の私たちに多くの先人たちの叡智を与えてくれるのです。

附記 今まで6回にわたり「高田地区関連文書類」を通して、近代高田町の歴史についてご紹介してきましたが、本号をもって終了とさせていただきます。ご愛読ありがとうございました。

（郷土 高木）

衛生と美容の日用品①—クリームの発売と普及—

化粧用のクリームが日本で作られるようになったのは、明治時代末の頃からです。それまでは髪付油や梳油などが化粧下として使用されていましたが、大正時代にクリームが代替として普及します。また各企業からも様々な種類が発売されたことにより、クリームは化粧下地のみならず、多様な用途で展開されていきました。

今回ご紹介するのは、資料館所蔵のクラブ化粧品の商品カタログ冊子と「クラブ美身クリーム」の容器です。

クラブ化粧品は、一九〇三（明治三六）年創業の中山太陽堂（現株式会社クラブコスメチックス）のブランドです。当時は「西のクラブ、東のレート」と呼ばれるほどの大手メーカーでした。



写真1 クラブ商品カタログ(4冊)

写真1の資料は、その中山太陽堂から発行された商品カタログ冊子です。右から、『美は禮節』、『近代美粧』、『クラブ堂級化粧品カタログ』(左上)、『化粧の花』(左下)と表紙に書かれています。いずれも商品の紹介兼使用方法説明、加えて近代的な化粧の方法を指南し、「現代の美人」に望まれる女性像や化粧の必要性を説いた内容となっています。

これら四冊のカタログには、残念ながら発行年は明記されていませんが、掲載されている商品の発売年数から、一九二八（昭和三年）年〜一九三五（昭和一〇）年の間に発行された冊子だと考えられます。

クリームの商品は主に「クラブ美身クリーム」「クラブコールドクリーム」「クラブ淡白クリーム」の三種類が紹介されています。「クラブ美身クリーム」は、バニシングクリームと言われる無脂肪クリームです。顔に塗りこむことでクリームの白さが消えることから、英語の「vanish」[消える、見えなくなる]と名付けられました。薄化粧、粉化粧に用いられ、その持続性と使いやすさから、明治

末期から昭和三〇年代まで広く使用されたようです。中山太陽堂からは一九二一（明治四四年）年「英国式クラブ美身クリーム」として発売されています。

冊子『化粧の花』の「お嬢様へ」の項目には「まだ學校時代のお若い方でも美身クリームだけは お肌の護りにおすゝめ致します 冬の荒れや雪焦け止めに なほまた夏の日焦け止めに それからお姉様のお化粧下に クラブ美身クリームは 四季を通じて あなたのそばを片時離れぬマスコットです」と説明されています(写真2)。また『近代美粧』ではより詳細に使用方法が示され、「濃化粧」「普通化粧」「淡化粧」「早化粧」それぞれの化粧に合わせたクラブ美身クリームの使い方、さらには化粧直し、ハンドクリーム、男性の髭剃り後の荒れ防止として等々と実に多岐にわたる利用法が書かれています。

写真3は、実際のクラブ美身クリームの瓶で

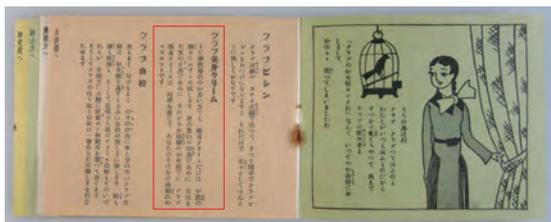


写真2 『化粧の花』「お嬢様へ」頁

す。容器は白いガラス製で、金属製の蓋には「クラブ美身クリーム」の表記と花の意匠が描かれています。

『クラブ堂級化粧品カタログ』には他にも中瓶、大瓶の表示もあり、サイズ展開もされていたようです。本資料のサイズは、カタログには記載されていませんが、直径四センチメートルほどの小さな瓶ですから、化粧直しなどのための携帯用であったのかもしれない。

また容器の中身が赤いのは朱肉が入れているためです。クリームの使用後も小瓶のみは転用され、長く使われ続けたのででしょうか。

次回以降も資料館所蔵の日用品から、特に衛生・美容に関するものを中心にご紹介していきたいと思えます。

(郷土 上田)



写真3 クラブ美身クリーム容器

作品を見むる

8 館慶一



一九五〇―六〇年代、個人蔵

生まれの画家・館慶一（一九二一

二〇〇四）です。東京美術学校（現東

京藝術大学）卒業後、一九四〇（昭和

一五）年頃から豊島区千早のアトリエに

入居しました。でも、写真に写っている

のは千早のアトリエではありません。館

は妻子を日本に残し、一九五二（昭和

二七）年に単身で渡仏。他の芸術家と交

流することもなく、ひたすら絵を描き続

ける生活を送りました。写真は、パリ・

モンパルナスにあった館のアトリエです。

パリに行く度にアトリエを訪れていた

という評論家の加藤周一が、館の生活を

次のように記録しています。

描きかけ

の作品で埋め尽くされた部屋の中を、大きなカンヴァスを抱えた男性が横切つて行きま

す。三重県四日市市

パリ在住の日本人画家社会とはつき合わず、国際的な画壇や大小の画廊の人々との接触もなかった。要するに彼の画室と街の環境との間には、言語を媒介とする意思の疎通が極端に限られていた。彼が画室の外へ出ることはほとんどなかった。世界はまた彼の画室の内側へ侵入しなかった。かくして画室は孤独に徹底した画家の小宇宙となる。*

館のアトリエには、積み重なる未完成のカンヴァスやデッサンと共に、鍋や衣類などの生活用品が混然一体となつて存在していました。制作と生活が直結したアトリエ空間と、その中に独り在る館の姿が浮かび上がってきます。話をする途中でふと立ち上がり、作品に一筆描き加えてまた戻る。そのように制作・生活する館を、加藤は「純粋画家」と呼びました。では、その「純粋画家」の作品を二点ご紹介しましょう。

まずは、千早のアトリエで制作された油彩作品《夜の肖像》（一九五〇年）で

す。この頃の館は、他の多くの画家と同様、芸術団体に所属し（日展、創元会）、団体展を活動の場としていました。この作品は第四回美術団体連合展に出品されました。

何が描かれているかということではなく、その色使いに注目してみましょう。まず目が行くのは、荒い筆さばきで無造作に引かれた橙色でしょうか。人物の手前から浮かびあがるように見える橙色と、背後に沈む深緑色の対比が、画面に奥行と動きをもたらしています。左上に唐突に置かれた水色の軽やかさがアクセントとなり、頭髮の茶色、洋服の薄緑色とリズムカルに呼应し合っているようにも見えます。色使いの巧みさが、具象でありながらも抽象への萌芽を感じさせます。絵のモデルは、館の孤独を支え続けることになる妻・憲子でした。

たった一人の渡仏から一二年後、パリ・



館慶一《夜の肖像》1950年、油彩・カンヴァス、90.7×71.3cm、豊島区蔵



館慶一《モンパルナス》1964年、油彩・カンヴァス、123.0×103.3cm、豊島区蔵

モンパルナスのアトリエで制作されたのが《モンパルナス》（一九六四年）です。絵具の塗りと削りを繰り返すことで独特の色味を帯びたカンヴァスから、黄、赤、白の三色が柔らかく浮かび上がります。そこに黒と少しの青が混じった線が行き交い、背景に溶けこむようにして消えていきます。モンパルナスの風景から着想を得たものの、具体的な形ではなく、街の生命力を色と動きで表現することに主眼が置かれています。

日本を離れることで得た孤独が、言語や形から極めて自由な、「純粋画家」としての制作・生活を可能にしました。館は、亡くなる前年までの約半世紀もの長期に亘り、たくさんの作品と共にパリのアトリエに住み続けました。

（美術 清水）

*加藤周一「館慶一または純粋画家」、『パリへー洋画家たち百年の夢』東京藝術大学美術館、二〇〇七年、一四四頁



図1 「座敷棟」外観

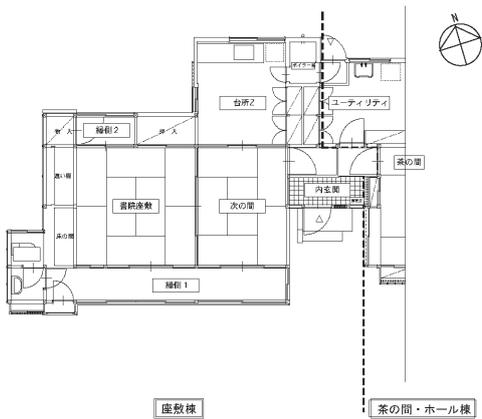


図2 「座敷棟」平面図



図3 書院座敷 床の間と違い棚

これまで旧鈴木家住宅を構成する3棟のうち、「書斎棟」(かたりべ117号)と「茶の間ホール棟」(かたりべ119号)を紹介してきました。最後に取り上げるのは、一九四八(昭和二三)年に埼玉の鈴木家本家から移築された「座敷棟」です。「座敷棟」は、棧瓦葺の切妻屋根を架けた木造平屋建で、南の庭に面して掃出し窓を設けた縁側を配した開放的で伝統的な和風建築です。間取りは八畳の書院座敷と六畳の次の間を中心とし、南側に縁側と便所、北側に縁側と三畳間(後に増築、現台所2)となっています。次の

間の東側には、移築時に「茶の間・ホール棟」へと続く内玄関が新設されました。(図1、2)一九四五(昭和二〇)年四月十三日の城北大空襲によって、鈴木家も木造母屋が焼失しました。一時は焼け残った書斎棟で生活していた時期もありましたが、翌年に「茶の間・ホール棟」を建設したことで生活環境は改善されました。その頃、信太郎の母シンは埼玉県吉妻(現春日部市)の鈴木家本宅に疎開しており、戦後も体調を崩し静養していました。しかし、一九四七(昭和二二)年九月に発生したカスリーン台風によって利

根川が氾濫し、鈴木家本宅も浸水被害に遭うという出来事がありました。幸いなことにシンが身を寄せていた書院座敷は浸水を免れましたが、これを契機に信太郎は書院座敷を東京に移築し、シンを呼び戻す計画を立てます。信太郎が移築を決意したのは、病床の母を住み慣れた家に住ませたいという意向と当時の建築制限の中では新たな増築は難しく、それに代わる方法として移築という手段がとられたものと考えられます。この移築工事は一九四八(昭和二三)年四月から始まり、七ヶ月ほどで

竣工したようです。

書院座敷は奥行約二尺の床の間と違い棚、床の間左手に平書院を付けています。全体的に簡素にまとめられており、住まいとしての使い易さ、親しみ易さを重視していたと思われます。(図3)

ちなみに、鈴木家は古くから続く吉妻の大地主であり、その屋敷は江戸時代に同地域を治めていた幕臣が建設したものをシンが嫁いできた明治二〇年代に移築したものといわれています。また、書院座敷を除いた鈴木家の本宅は、一九五一(昭和二六)年に千葉県野田市に移築され、現存しています。

「座敷棟」は、明治二〇年代に北関東の農村部に建てられた伝統的な書院造による近代和風建築であり、建物そのものが歴史的価値を持ちます。加えて、戦後直後の住宅不足の中で移築という方法によって住宅確保を行っていた事を示す具体的な遺構でもあり、住宅史・文化的な観点から意義を持つ貴重な遺構ということが出来ます。(郷土 木下)

「旧鈴木家住宅」は、豊島区東池袋五丁目(所在する歴史的建造物で、正確には「豊島区指定有形文化財(建造物)旧鈴木家住宅」という名称です。現在豊島区では、この建物を改修・整備して「仮称)鈴木信太郎記念館」を開設する取り組みを進めています。

【展示紹介】 庁舎まるごとミュージアム 3階 郷土資料コーナー
戦争を考える夏2016 「豊島区と空襲」
12月15日(木)まで
区民が撮った空襲の記録

郷土資料館では、一九八四（昭和五九）

年の開館以来、戦争体験を掘り起し、語り継ぐため、戦争と平和をテーマとした展示を行ってきました。現在当館は、大規模改修工事に伴い休館中のため、区庁舎の回廊を利用した「まるごとミュージアム」3階にて、「豊島区と空襲」と題したパネル展示を行っています。

展示は、「豊島に空襲があった日」、「戦時下の区民生活／防空演習」、「区民が撮った空襲の記録」、「豊島区空襲被害状況一覧」「戦災区域図」の五枚のパネルで構成されていますが、ここでは、空襲の惨状を区民が記録した貴重な寄贈写真の一部をご紹介します。

豊島区では、一九四四（昭和一九）年一二月から翌年五月までに、計一回の空襲を受けました。なかでも一九四五年四月一三日、深夜一時から約三時間半にわたり、豊島区を含む東京西北部を襲った「城北大空襲」では、約三五〇機のB二九が二千トン余の焼夷弾を投下し、豊島区では死者七七八名、負傷者二五二三名、罹災家屋三万四千戸を数え、

区約七割が焼失しました。

左の二枚は、城北大空襲から数日後に撮影された写真です（堀尾光男氏寄贈）。①は西巢鴨二丁目（現北大塚二丁目）で氷屋を営んでいた父長次氏（左端）とその親戚、近所の人たちが写っています（撮影者は写真店の山下氏）。空襲の夜は着の身着のまま避難し、命は助かったものの自宅は跡形も無くなり、一面焼け野原が広がる中、焼け残った生活道具を



①

前に人々はみな不安な表情をしています。

②は堀尾氏の自宅付近から大塚駅方面を写した一コマです。左手前の建物は大塚松竹館の焼け残った二階の映写室で、その奥に見えるのが白木屋大塚分店です。手前のトタン板の瓦礫の山は空襲時の火災旋風の爪痕でしょうか。長次氏は、廃墟となった町だけでなく、防空演習など戦時中の生活を愛用のカメラに収め、記録に残しました。戦時下の豊島区で何がおこっていたのか、人々の暮らしはどうだったのか、区民が撮った写真は、七一年前の戦争の脅威と悲惨さを私たちに強く語りかけてきます。（郷土 横山）



②

編集後記

『かたりべ』一一二号をお届けいたします。リオオリンピック・パラリンピックも閉会し、全国各地の博物館で展示会などが開催される季節となりました。昨年に引き続き、徳川家康の没後四〇〇年を記念した展示などが見受けられます。最近では、歴史的な偉人の生誕や没年を記念した展示が増えているように感じます。

豊島区でいえば、実は来年、安芸広島二代藩主であった浅野光晟が生誕（一六一七年）して、四〇〇年になります。なぜ区と関係しているかといえますと、浅野光晟の正室自昌院（満姫）は、日蓮宗に帰依しており、一六六四年にその寄進によって雑司ヶ谷鬼子母神の本殿が建立されました。

さて、雑司ヶ谷鬼子母神といえは、去る七月に国重要文化財に指定されました。自昌院の生誕は一六二〇年ですので、若干こじつけのようにも思えますが、これを機会に足を運んでみてはいかがでしょうか。（編集 高木）

かたりべ
No.121
 2016年9月30日
 郷土資料館
 豊島区立郷土資料館
 (休館中)
 東京都豊島区西池袋2-37-4
 豊島区立勤労福祉会館7階
 電話 03-3980-2351
 URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html>